資料紹介

【歴史・民俗】

横田家文書「三つ山道中記」

元東浦町誌編集委員　津田　豊彦

はじめに

富士山、立山、白山の三霊山を廻る順礼は中世においては、専業の宗教者の間では実践行として行われてきた。

近世初期においては、各霊山の御師や宿坊の連中によって檀那場が形成されつつあったことを踏まえ、その檀那場を基盤として三禅定の民衆化が進み、近世中期以降となると尾張、三河、美濃からの多くの民衆の三禅定がみられるようになった。その事例として道中記、往来手形、絵馬、登拝記念の石造物、あるいは、地元と各宿場、御師との遣り取りの文書が各所に残されているが、特にこの知多半島にはこれらの資料が集中的に残されている。ここで紹介する横田家文書「三つ山道中記」もその一つである。

1　横田家と伝来文書

知多郡美浜町布土上村の横田家とその伝来文書については、既に森田秀司氏が郷土研究誌『みなみ』70 ～ 72 号[(1)]に紹介し、さらに「三つ山道中記」を翻刻掲載してみえる。それによれば横田家は元禄頃より続く名家であり、1879 年（明治 12）までは代々嘉左衛門を襲名、その後も 3 代つづいて現在に至っていたっている。嘉左衛門は大峯山、白山、高野山、善光寺、秋葉山等の先達、あるいは講元を務め、村の諸行事、悪厄払い、病気払い、医療、困り事相談などにも応じていたとのことであるから、いわゆる、地元における里修験的存在であったようである。明治の初めごろまでは宿屋をしていたが、その後は小間物商、古物商、製菓業などを営んできた。特に 1931 年（昭和 6）1 月 21 日、13 名の犠牲者を出した一向山磨砂山落盤事故では、同年秋に同家が勧進元となって追善供養のため関東大相撲を招き、大相撲大会を興業してその利益を被害者家族に贈り慰めている。同家には今にもその時の大きな板番付表（171 × 106cm）が残されている。

同家に伝来保管されている文書には、「三つ山道中記」のほか大峯講、秋葉講などのものがある。多少の経緯があったものの現当主横田一則氏のはからいで 2017 年 9 月、原本を拝見、接写させていただくことができた。本文書には他に見られないような記述があり、また、森田氏の翻刻にはときには誤りともみられ、不明なところもあるので、森田氏の翻刻を参考にしながら本文書の翻刻を試みた。さらに気が付いたことをつぎにあげてみる。

2　横田家本「三つ山道中記」

現在のところ、近世以降の三山禅定道中記やそれに類する紀行文は、池大雅の「三岳記

行図」(1760年・宝暦10)をはじめ18件ほどが知られている。このうち14件は知多郡に所在のものである。これによってもいかにこの知多地域においては三山禅定が盛んであったことが知られる。

横田家本「三つ山道中記」は縦13.5cm、横31cmの横帳、表紙は厚紙で表、裏表紙共に柿渋が塗ってある。表表紙にはかろうじて「三つ山道中記」の墨書を読むことができるが、裏表紙は森田氏によれば松栄寺の墨書があるとのことであるが今は読むことは出来ない。なかは19丁の綴りである。

この道中記で最も注目されるのは、裏表紙の内側に「南無浅間大菩薩　尾州知多郡大野　松栄寺　天正弐年道中記用　享保十三戊申六月改メ記ス　少々道程相違ハ可有」の記述である。1574年(天正2)のままであれば、現存する三山道中記で一番古いものということになるが、約150年後の1728年(享保13)に書き改められているので、この道中記はどこまで古態を留めているかは検討する必要がある。

まず、その前に大野(現常滑市)の天満山松栄寺についてみると、天台宗で本寺は春日井郡野田(現春日井市)の天台宗密蔵院である。やはり密蔵院を本寺とする知多郡西阿野村(現常滑市)の天台宗高讃寺との間で、貞享・元禄の頃、檀那を奪いあう相論が起きている。これに関しての文書が、密蔵院と知多郡小鈴谷村(現常滑市)の盛田家鈴渓資料館に残されていて、密蔵院の裁定により本来、松栄寺は富士山先達、高讃寺は白山先達として、富士山先達は三禅定の場合は富士山、立山、白山と左廻りに行い、白山先達の場合はこの逆廻りで実施すべきであることが知られる[(2)]。

本道中記以外の道中記は道者、あるいはその村での禅定の経験者で先達的役目を果している者の残したものであろうと考えられる。このように専業的な宗教者の先達が記録した道中記は貴重である。例えば宿泊にしても、大宮村山では大鏡坊、甲斐の吉田では大車屋田辺与右衛門宿、芦峅寺では日光坊などであり先達と御師との連係がみられる。ちなみに芦峅寺の衆徒は松栄寺で出開帳を行ったり当地へ来たときの宿所にしている。富士山々頂大峯では噴火口の峯々の本地仏八葉九尊を書き上げているのも専業的な宗教者であればこそである。

もともと道中記は後続者のための道案内の里程表である。この道中記をみてみるともとより道案内、諸経費等も詳しく記録しているが石和での日蓮の石経や善光寺の女人の月水札等、寺社についての記事も多いようにみえる。

その道程であるが、現在知られている三山禅定道中記では、知多郡小鈴谷村盛田家3代目久左衛門の残した1678年(延宝4)の「三禅定之通」(以下、盛田家本とする)[(3)]で、横田家の「三つ山道中記」(以下、横田家本とする)より50年前に書かれたものである。両者のその行程を比較してみると、盛田本は小鈴谷村より船で出発し三河の高師に着き東海道へ出ている。横田家本は布土から大野に行き緒川村から船で三河の刈谷に渡り東海道へでている。この違いだけで、それより先は富士山→(善光寺)→立山→白山と密蔵院の裁定通り左廻りに廻っている。盛田家本には先達は書かれていないが地理的にみても松栄寺の檀那で、松栄寺を先達としていたのは間違いない。また、盛田家本でも富士山頂を本地仏の

名は書いていないが、八葉といっているなど共通するところもある。従って横田家は盛田家本と重なるということは古態をとどめているとみることができる。ただし、1574 年（天正 2）の横田本に対し盛田家本には「康永三年（1344）　大暑天、泰隆記」の書入れがある。この泰隆とは南北町時代、尾張国中島郡や知多郡に所領を持つ荒尾泰隆のことであり、横田家本と盛田家本とどちらが古いかは一概に決めつけることはむつかしい。

横田家本には村井と稲荷山間と舟見と三日市間はこの横帳 1 頁に上下 2 段に分けて道程が書かれている。（横組の翻刻では左側が上段、右側が下段になる）。上段の道程は全く盛田家本と全く同じである。下段の道程は近世中期以降はすべてこの道筋を通っている。このころになると中山道をはじめ国内の街道や宿駅が整備され、便利安全の道を選ぶようになったためであると思われる。

なお、余分のことながら、近世も後期になると庶民の生活も豊かになり、また、各地の情報も出廻り、人々も物見遊山の余裕も出て来、交通網も益々整ってくると、この三禅定の順礼に日光、江戸、鎌倉見物などが加ってくる。その道程は白山、立山、善光寺から中山道を経て日光、江戸、鎌倉へ廻り、北より須走より富士山頂へ往復して東海道にもどり、秋葉山、鳳来寺に寄って帰ってくる。このため、三山禅定は専ら右廻りが多くなってくる。

おわりに

まだ、一つ問題にしなければならないのは、この道中記が松栄寺から横田家へいかに伝来したかの問題である。ただ、想像させられるのは横田嘉右衛門は里修験的存在であったことから、松栄寺の先達の手伝いか、あるいは代行をしていたのではないかと考えられ、従って松栄寺から横田家へと伝来となったと思われる。

三山禅定については、すでに小林一蓁氏[(4)]や高瀬重雄氏[(5)]などの研究があるが、近年は中世からの多くの資料が見い出され、近世から近代にわたって福江充氏[(6)]や加藤基樹氏[(7)]が多くの論考を発表している。さらには 2018 年 7 月 29 日、名古屋大学では「三禅定絵解フォーラム」が開催されに至っている。もとよりこれからも新たな資料も見い出され研究も進むことになると思われる。横田家本は早くから知られていたが、その発表が地域的な郷土研究誌であったことと、横田家の事情もあって、これまで多くの研究者の目に触れることがなかった。

先述したように専業的な宗教者の先達の手になるものであり、古態を留めつつ新たな道筋を記録している。これ以降はこの道筋を選んで物見遊山を含む三山禅定の順礼となる。横田家本は古い三山禅定から新しい三山禅定へ移る時点で記録されたものとみることができる。今までの多くの資料にもとづいて三山禅定の論考が進められてきたが、さらに多くの特徴をもつ横田家本を論考の対象に加えられるべく、同資料の紹介させていただいた。

飜刻　横田家本「三つ山道中記」

（表紙）「三つ山道中記」
三つ山道中記
大野ゟ四里
緒川　苅谷迄舟渡し　二里半
池鯉鮒　三里四丁
　　大橋弐里四丁　傳馬迄壱里
岡崎　壱里半四丁
藤川　弐里半九丁
赤坂　十六丁
こゆ　弐里半五丁
吉田　壱里半六丁
ふた川　弐里
白須賀　弐里十丁
新井　舟渡シ壱艘百八十二文　廿三丁
前坂　弐里半十二丁
濱松　天龍川廿四文　三里七丁
見付　一里半
ふくろい　弐里
掛川　一里廿九丁
新坂（につ）
　　わらび餅有　直段　定而からてよし　新坂峠殊外難所
　　さよの中山名所此所也　南に誓願寺迚むけんの鐘之寺へ壱里半也
　　二里
かなや　一里　大井川有　川ばた二銭極メてよし
しまた　弐里
藤枝　一里
おかへ　二里廿三丁
まりこ　あへ川有　五文餅出し名物
　　壱里半
府中　入口二浅間大社日本一御社成り　十丁斗より
　　二里廿三丁
江尻　富士頭上二見ル
　　一里弐丁
おきつ　清見寺古跡　むかふ二みよの松原有
　　弐里

ゆい　壱里
神原　富士川舟渡し　川はたより大宮迄馬借りてよし　七八十文ニ而借ル　川越へ川之つゝみ乗て少し登ル　先達ハ渡銭引
　　弐里
岩本　此所ニも馬有
　　三里
大宮　先達へ馳走馬出つ　先達目見へ百文
　　御炊坊(みかしきほう)着　房入百文宛　はたご夜飯片はたご也
　　山役六道壱人分三十弐文　手形取
　　一里半　十郎宮五郎宮有
村山　先達目見へ百文
　　大鏡坊着　朝飯、片はたご也　壱人二百文つゝ泊ル　山役百三十三文
　　調物
　　一　壱人前白米五合程調
　　一　たい松　見合
　　一　さゝゑ壱本　究水入レ少キかよし
　　一　(薬)樂師岳迄　中号壱人七百文
　　一　行者室迄三百文　登り下り頼者五百文
中宮八幡　三里　馬壱疋百廿三文
　　行者室泊り手前支配
　　室成り室銭不入　唯シ室番ニ見合銭とらする
　峯初宝印押す
　本前両部大日如来
　　御峯
　一嶽ハ延命地蔵菩薩
　二嶽　阿弥陀如来
　三嶽　観世音菩薩
　四嶽　釋迦如来
　五　　弥勒菩薩
　六　　藥師如来
　七　　文殊菩薩
　八　　寶勝如来
　釼岳　勢至大谷雪横手
　　さいの河　畜生谷
　　下向ニハ大いきやい〆左へ下り而由　右へ行ハすはしり口　左ハ甲斐吉田口也
　　中宮有　下モ淺間大社

甲斐吉田　中頃左手　大車やとも云、たなべ与右衛門宿
　　弐里
川口　淺間大社　天神峠上下三里之坂　峠ニ天神社有　馬借り而由　難所也
　　三里
藤木（とうの）　壱里半
黒駒　このかたと云名馬出ル　源三位頼政手付
　　弐里半
井沢　日蓮（にちれん）石つか有、入口前野ニ有　町中頃ニウカイ寺品々宝物
　　一里半
苻中　甲斐善光寺開帳百文　苻中入口大がらんしんけんこんりう
　　三里　柳町泊りよし
仁羅崎　川有　四里
大か原　壱里
長来岩　二里
津瀧　三里半
葱沢　須和明神　直道有　壱里より
　　三里
上須和　観音堂参て由　七寺からん　一里
下須和　須和明神入口　わだとげ（峠）へ行てよし
　　三里半　塩尻峠有
塩尻　弐里半
村井　一里半
松本　一里半
岡田　岡田峠有
　　一里半
かや原　一里
相田　能宿成
　　三里　立峠有
青柳木　一里拾丁
おふみ　猿はんば峠有難所、かしはも
　　ちあり　三里
稲利山　三里
和田峠
中久保　弐里
なかせ　弐里
上田町　三里
坂木　三里
屋しろ　三里
丹波嶋　是善光寺へ一里半　同道也
丹波嶋　此所必不可泊ル
　　一里半　縄上り舟渡有
善光寺　開帳金壱歩　女人月水札出つ
　　戸隠中院へ五里　中院ゟ奥院へ壱里　中院ニ荷物預ケ帰テ昼飯して　柏原四里
　　馬かりてよし　道悪敷候　善光寺ゟ中院迄馬道の案内共ニかりて由

三里
柏原　三里半
野尻　道ゟ右水海あり
信州越後堺　壱里
関川　入口ニ天下の番所有　たきりとて悪鋪谷有　下アシク
一里
瀧津　二里
関山　此処ゟ明光山　六月廿三日四日明光山江登ル　常ニ不登
三里
新井　中頃右手つかだ太右衛門宿
二里半
高田　越後府　城下　天下り給所　能茶や有　五知女来是ゟ
弐里拾丁
今町　舟のり壱里六七文ニ而壱人乗ル　魚津迄廿七八里　なめり川へ弐里　是ゟ上市へ弐里　上市ゟ三さだ四り　三さたゟ足倉へ三り
五知村　左手三丁　此所からも舟有　てん気悪鋪西風吹かハ此道よし
四里
有孫（まこ）　弐里
のふ　四里
いとい川　四里
となみ　をやしらす子しらす有　弐里
一ふり　越後越中国境有　弐里半
越後加賀国境有　加賀番所ニ人数あらたむ　弐里半
とまり　大方ハうら山へまわりてよし　壱里半
弐里半
舟見　一里半
うら山　弐里
三日市
入膳　九郎平四十八ヶセ　東海道大井川同
大川有　壱里川はゝ　弐里半
三日市　弐里　大川有
魚津　是処ゟ上市へ直道有　川あまた有　悪鋪道成り　上市へ三里半程有
弐里
なめり川　弐里
上市　二里　此間悪敷道也
福田　此所諸手ふしゆニ候間上市の馬方と相談シテ直ぐニみさだへ馬をとおしてよし
二里
みさだ　三里
足倉　先達目見へ弐百文

日光坊着　二夜泊り　はたこ壱人弐朱つ、　荷持壱人三百文ツ、　御山へ米壱人分六合ツ、　日光坊ニて調而味噌塩ハ日光房より登ル　おくり馬ニ百文とらセ真綿ハ必日光坊ニ求而由

山ゟ下りの日きし申人坊中弟子又ハ子供にて五拾文とも百文とも遣す　親兄弟見合百文ツ、もひきもてとらす　酒む(か脱)へひつ弐百文入レ遣ス　持参者五十文とらせ申候

弐里半

岩倉　悪鋪川あまた有　三里半

富山　旗振や町南出口右側屋ねに右様ノかんはん有　播磨屋弥三右衛門迚　御免反魂丹是也　反魂丹名物　出口舟橋有

三里半

小杉　小杉ノ出口拾丁斗出テ左手へ入近路也　随龍寺少々より参詣てよし

弐里

高岡　入口川有橋有又小川有　舟渡し　壱人弐文つ、　布有

四里

ゆするき　絹紬　ゆする木布有　此間越中加賀境　中頃くりから不動有

三里

竹橋　名物砂糖餅有　目くら馬多見てのりてよし

壱里

津は田　四里

兼澤　加賀苻中也　森本町中条屋八郎兵衛殿　吉手取もらひ　昼飯してよし　造作代吉手世話やき共見合五人百位ニ置てよし　若し泊り候得者宿ちん高直候間吉手もらひ少々ニ而出つル由　木銭壱人四五拾文

四里

釼　加賀之菊酒此所成　つるきゟ八丁斗行道ゟ左ニしら山権現大社成り　少シより

四里

さら　悪鋪処　壱里

きなめり　悪敷処　中頃右テニ番所有　兼沢より持参ノ吉手ニ裏判付七八丁行テ関所有渡ス　是処ニ而牛首道能尋テ行テ由　平泉寺江之道ト云也　是之きなめりゟ牛首五里有

関所ゟ左へ行ハをそ道也　右へ行ハ牛頭(首)平泉寺道成り　一瀬之室行□よし

二里

をそ　加賀之内ニ而聞ハをそも能キト云共殊外悪敷候　必ニをそ江行事堅無用御座候

牛首　宿五郎兵衛宿也　見合ニ而も又ハ定而も由　中号壱人四百文

白山六道銭今ハ無シ　若シ牛首ニ而彼是申候共必壱銭出ス不可申候　一ノセト云所ニ平泉寺之室此所埒明申候　然共壱文不出候

白山ハ道のり遠　上り下り共気毒成共　御山ゆふたち繁難儀多し

今しミづ室ニ昼飯よし　別山社より室迄八丁斗り南
石燈白　宿坊五郎右衛門一夜泊り而百文　昼飯五拾文
三り
此所ゟつるき迄まわた有
長瀧　法覚坊一夜泊り而百文　昼飯五十文　唯通時壱人廿文位見合初穂迚遣ス
長瀧寺七堂からん　大社成
壱里
白鳥　三里
つるき　三里半
八幡　宮城　よき家泊悪敷
壱里
ちどら　三里
かりやす　三邑有泊よし
弐里
須原　上宮　奥院　橘宮
弐里
かうつち　弐里
関　泊り悪シ　此間ひたセとて川有渡テ由　大水ニハ舟有壱人三文ツヽ
弐里
勝山（かち）　とまりよし　勝山ゟ舟ニ乗テ由　犬山壱里間川舟
壱里
犬山　三里
小牧　此間川有
三里半
名古屋清水口迄
百文之牛ハ乗者三十弐文荷物六十四文

南無淺間大菩薩
尾州知多郡大野　松栄寺
天正弐年道中記用
享保十三戊申六月改メ記ス　少々
少々道程相違ハ可有

註

(1) 森田秀司「横田嘉左衛門家文書（一）～（三）」（郷土研究誌『みなみ』第 70 号～ 72 号、南知多郷土研究会発行、2000 年・2001 年）。

(2)「貞享 4 年 10 月　富士山・白山両先達出入につき密蔵院より知多郡西阿野村高讃寺宛申渡し書写」春日井市密蔵院文書。
「富士・白山両先達争論につき書状」元禄 2 年 5 月 4 日　盛田家文書 XVI 2。
「覚　富士・白山両先達争論につき願上」元禄 2 年 7 月　盛田家文書 XVI 3。
「富士・白山両先達につき争論」元禄 2 年 8 月　盛田家文書 XVI 4。
『愛知県史』資料編第 17 巻（愛知県史編さん委員会編、愛知県発行、2014 年）史料番号 265・266。

(3)『三禅定之通　延宝 4 年 6 月吉日　盛田久左衛門』　盛田家文書 VI 26。
『愛知県史』資料編第 17 巻　史料番号 264。

(4) 小林一蓁　「三山禅定について」（『まつり』31 号、まつり同好会、1978 年）。

(5) 高瀬重雄　『高瀬重雄文化史論集Ⅰ　立山信仰の歴史と文化』（名著出版　1981 年）。

(6) 福江充　「富士山・立山・白山を巡る三禅定の時期的変遷」（『立山信仰と三禅定』、岩田書院、2017 年）。

(7) 加藤基樹　「三禅定」考―成立と『三つ山迎』にみる実態―」（『富山県「立山博物館」研究紀要』17 号　pp.85-117、富山県「立山博物館」、2010 年）。